様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２７７２

研究課題名（和文）明治初期における聖書翻訳と日本語意識の形成に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Bible translation and the Formation of Japanese Language Consciousness Early in the Meiji Period

研究代表者
齋藤　文俊（SAITO, Fumitoshi）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：９０２０５６７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治初期という、漢文訓読体が優勢であった時代に、「日本語」がどのように意識されていたのかを明らかにするため、漢訳聖書の影響をうけて翻訳された複数の「聖書」を資料としてとりあげ、漢文訓読語法や当時の俗語などの「やさしい日本語」がどのようにその中に含まれているのかを調査し、また、明治初期の翻訳小説などの漢文訓読語法と対照することにより、当時の「日本語意識」の形成過程を明らかにしたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
聖書の語彙・語法・文体の研究は、江戸から明治にかけての文章語の全体像を研究していく上で不可欠なものであり、日本語史研究および近代日本文学研究に貢献することができる。また、近代以降の文学作品をはじめ、聖書の語句は様々な形で引用されており（「初めに○○ありき」などという言い方はその典型であろう）、それらの表現がどのように形成されてきたのかも解明される。さらに、近代日本におけるキリスト教受容史、また、聖書翻訳学の研究面でも寄与できるものと考える。

研究成果の概要（英文）：In order to clarify how people were aware of the "Japanese language" in the early Meiji period, when the Chinese reading style prevailed, this study took several "Bibles" translated under the influence of Chinese translations of the Bible and investigated how "easy Japanese" such as the Chinese reading system and slang of the time were included in them. By comparing them with the Chinese reading of the translated novels of the early Meiji period, I have clarified the formation process of the "Japanese language consciousness" of the time.

研究分野：人文学

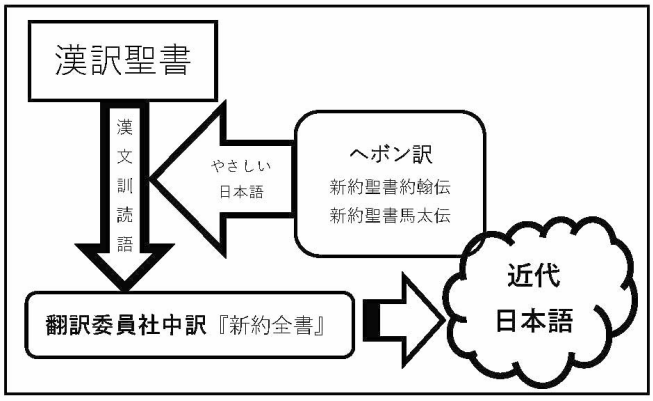
キーワード：日本語史　聖書翻訳　漢文訓読　日本語意識　近代語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

明治初期において、「日本語」はどのように意識されてきたのか。話し言葉と書き言葉の乖離が大きかった当時、正式な文章を記す文体として選ばれていたのは「漢文訓読体」であり、それは当然、江戸時代の漢文訓読体の伝統を引き継いでいる（齋藤文俊（2011）『漢文訓読と近代日本語の形成』勉誠出版）。ただ、その中にあって、言文一致運動が盛んになる以前にも、誰にでもわかるやさしい言葉で文章を綴ろうとする動きがあった。本研究の代表者は、この点に注目し、平成 26～28 年度の科学研究費補助金・基盤研究(C)（一般）において、「近世における漢文訓読と日本語意識の形成に関する研究」という課題により研究をすすめてきた。

その研究の過程で、明治初期における聖書の翻訳を調査することが、上記の問題点を明らかにするために有効な方法であることが明らかになった。聖書は、威厳のある文章でなければならないという考え方の一方で、誰でも簡単に読めなければいけない、という相反する性質を備えており、その考え方をどのように文章化していくかがまさに当時の日本語意識といえるからである。



日本における聖書の本格的な翻訳は、左図のように、幕末期に始まるが、その際参考にされたのが、中国ですでに翻訳されていた「漢訳聖書」（ブリッジマン･カルバートソン訳 1859）である。日本には古来漢文訓読という便利な翻訳システムがあり、しかも漢文訓読体の聖書には文体的な威厳もある。しかしその一方で、聖書翻訳に関わった J.C.ヘボン（1815-1911）などの外国人宣教師を中心に、聖書はもっと平易な文章にするべきだという意見も出ていた。

このようにして翻訳された翻訳委員社中訳『新約全書』（明治 13〈1880〉年刊）は、漢文訓読体を基本にしながら、和文の要素も兼ね備えたものとなっている。そして、その訳語・語法・文体は、現代の聖書にも大きく影響を与えているだけではなく、近代日本語の形成にも大きな影響を与えたのである。

このような事情は、韓国（朝鮮）における聖書の翻訳の場合も同じで、やはり漢訳聖書の影響を受けつつ、ロス（John Ross）がハングルで翻訳した『ルカによる福音書』･『ヨハネによる福音書』（1882 年）、『耶蘇聖教全書』（1887 年）があり、またその一方で、李樹廷が当時の知識人層の間で広く使用されていた「吐」をつけて翻訳した『懸吐漢韓新約聖書』（1884 年）も出されている。

（参考：洪伊杓（2016）「朝鮮半島における聖書翻訳再考察」『アジア・キリスト教・多元性』第 14 号、金成恩（2013）『宣教と翻訳　漢字圏・キリスト教・日韓の近代』東京大学出版会など）

このような、韓国（朝鮮）の聖書と対照することで、日本語訳聖書の翻訳方法の特徴がより明確になるものと期待される。

以上のことから、明治初期における日本語意識の形成過程を明らかにするためには、聖書を資料として使用することが望ましいと考えられる。

２．研究の目的

本研究は、明治初期という、漢文訓読体が優勢であった時代に、「日本語」がどのように意識されていたのかを明らかにするため、漢訳聖書の影響をうけて翻訳された複数の「聖書」を資料としてとりあげ、漢文訓読語法や当時の俗語などの「やさしい日本語」がどのようにその中に含まれているのかを調査していくとともに、翻訳者の意見、またその聖書に対する当時の読者達の評価を収集することにより、多角的に明治初期における「日本語意識」の形成過程を明らかにしていくことを目的としている。

３．研究の方法

上記の目的を達成するため、下記①～③の作業を行った。

①明治初期の日本及び韓国における聖書の翻訳に用いられた語法の幅広い収集・調査
②調査結果を多方面の研究に役立てていくために、コンピュータを用いたデータベース作成
③国内外の聖書翻訳研究者、言語研究者との情報交換と共同研究への準備

本研究において調査の対象としたのは、下記のような資料である。

１．ブリッジマン・カルバートソン訳「漢訳聖書」（漢訳聖書の訓点本）
２．ヘボン訳『新約聖書約翰伝』・『新約聖書馬太伝』
３．翻訳委員社中訳『新約全書』（分冊で出版されたものを含む）

なお、当初は、上記１．～３．の明治初期の邦訳聖書に加え、韓国（朝鮮）語訳聖書の調査を行う予定であったが、新型コロナウィルス感染症の影響により、国内外、特に韓国での調査が不可能な状況となったため、国内でインターネットを用いての調査へと方針を変更し、上記３．の影響を受け、明治後期以降に翻訳された下記資料を調査した。

４．高橋五郎訳『聖福音書』上、明治二八（一八九五）年、下、明治三〇（一八九七）年、天主公教会出版
５．ラゲ訳『我主イエズスキリストの新約聖書』明治四三（一九一〇）年、公教会
６．ニコライ訳『我主イイススハリストスノ新約』明治三四（一九〇一）年、正教会
７．大正改訳：『改訳 新約聖書』大正六（一九一七）年刊、大英国・北英国聖書会社

４．研究成果

研究成果については、新型コロナウィルス感染症の影響による調査方針の変更および調査期間の延長もあったため、年度ごとに記述していくこととする。

（１）2017（平成 29）年度

１年目は、翻訳聖書の中で使用されている漢文訓読語を調査し、その中で特に「ナカレ」についての調査結果をまとめた。「漢訳聖書」の訓点本、ヘボン訳、社中訳の三書を対照した結果、「ナカレ」は三つの資料に共通して多く使用されていることがわかった。特に、わかりやすい日本語を目指したヘボン訳でも使用されていること、社中訳では、漢訳聖書以上に用いられていることは特徴的である。禁止表現としての「ナカレ」は、聖書の中で、威厳を示す語法として使われていたことがうかがえる。

一方、「ナカレ」は、雑誌『太陽』における使用状況を確認すると（「太陽コーパス」を使用）、明治 28 年・明治 34 年における使用は多いものの、明治 42 年、そして大正期になると使用数が少なくなる。そのような状況を承けて、大正 6 年に刊行された、大正改訳『新約聖書』においては、「ナカレ」は用いず、「な」が使用されていた。これについては、刊行当時から批判する意見が出ていたようで、このような明治後期以降の状況については今後の課題として検討していくこととした（下記（５）参照）。

この成果は、韓国外国語大学校 CORE 事業団海外学者招聘講演会・韓日学術交流会（2018 年 1 月 20 日、韓国外国語大学校ソウルキャンパス）において、「近代日本における聖書の翻訳と漢訳聖書」として口頭発表するとともに、「近代日本における聖書翻訳と漢訳聖書――「ナカレ」を中心に――」（『論集：日韓学術交流会―言語文化を巡って―』第 4 号　2018 年 3 月 31 日　pp. 41-51）として発表し、韓国の学者からも貴重な意見をえることができた。

（２）2018（平成 30）年度

2 年目は、「欲ス」についての調査を中心に行った。「欲ス」も漢文訓読語法であるが、雑誌『太陽』の用例数を確認すると、やはり明治 42 年、そして大正期になると使用数が少なくなっている。そのような状況下、「漢訳聖書」の訓点本、ヘボン訳、社中訳の三書の使用状況を確認すると、訓点本で「欲ス」と訳されている箇所でも、社中訳においては「欲す」としていない点がみられ、「あまり多く漢文がまじっていない」、「容易に民衆に読まれ、理解され」得る文体を目指したという意識がうかがえた。しかし、その一方、ヘボン訳には「ほつす」が用いられており、そして社中訳においても「欲」という漢字が用いられ、そこに「ほつす」以外のルビ（「おもふ」「かなふ」「ねがふ」など）をつけるという例も見られた。この成果は、「明治初期における聖書の翻訳と日本語意識――漢文訓読語法「欲ス」を例に――」（沖森卓也教授退職記念『歴史言語学の射程』2018 年 11 月、三省堂、PP. 497-506）として発表した。

このように、漢文訓読語法を他の「やさしい」表現に言い換えるということは、明治初期の『欧洲奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』との間にも見られ、今後検討していくこととした（下記（３）参照）。

（３）2019（平成 31・令和元）年度

３年目は、聖書以外の翻訳小説にも調査範囲を広げ、特に、漢文訓読体で翻訳された『欧洲奇事花柳春話』（明治 11 年刊）と、和文体で書かれた『通俗花柳春話』（明治 16 年刊）を対照させ、その中で用いられている漢文訓読語法を調査することにより、両者に見られる日本語意識についても考察を行った。具体的には、本研究で昨年度までに調査した「ナカレ」「欲ス」の他、「能ハズ」「曰ク」そして敬語の用法である。

『欧洲奇事花柳春話』で「ナカレ」が用いられている対応箇所において、『通俗花柳春話』では、「・・・な」「・・・給へ」「・・・かし」「な・・・」「・・・そ」となっており、また、『欧洲奇事花柳春話』で「欲ス」が用いられている対応箇所において、『通俗花柳春話』では、「まほ

し」「ばや」「願ふ」などの和文系の語彙が用いられていた。
　この成果は、「翻訳小説の語彙」(『シリーズ日本語の語彙　第5巻　近代の語彙(1)』、2020年7月、朝倉書店、pp.48-57）の中で論じている。

（４）2020（令和２）年度・
　本研究の申請時には、日本語訳聖書の翻訳方法の特徴を明確にするために、「1. 研究開始当初の背景」にも記したように、韓国（朝鮮）の聖書翻訳と対照させることを計画し、
　　ロス訳『ルカによる福音書』・『ヨハネによる福音書』・『耶蘇聖教全書』
　　李樹廷訳『懸吐漢韓新約聖書』
　　李樹廷訳『馬可伝福音書諺解』
などの調査をする予定でいた。しかし、新型コロナウィルス感染症の影響のため、国内・国外での調査が不可能となったことにより、インターネットによる文献調査へと研究計画の変更を余儀なくされ、またその計画の変更による調査時間を確保するために、補助事業期間の延長を申請し2021（令和3）年度を最終年度とした。
　この４年目においては、近世から近代における漢文訓読の流れを、「可能表現と訓読語法」「白話小説・蘭学資料・英学資料と漢文訓読」「翻訳における文体と日本語意識」という観点から整理し、近代に引き継がれた漢文訓読語法が、当時の日本語意識を解明する指標となることを指摘する「訓点資料研究に期待すること「近世漢文訓読研究から」」(『訓点語と訓点資料』第146輯、2021（令和3）年3月、pp.123-129）という報告を行った。

（５）2021（令和３）年度
　最終年度においては、これまでの研究成果をもとに、明治初期に翻訳された聖書の語法が、明治後期にどのような影響を与えているかという点に付いての考察を行った。調査した資料は、上記「３．研究の方法」に記載した、４．～７．である。この成果は、「明治後期における翻訳聖書の文体」(『国語と国文学』99-6、2022年6月、pp.51-65）として発表した。
　本年度の調査においては、それぞれの資料における「能はず」と「なかれ」という二つの漢文訓読語を調査するとともに、それぞれの資料が、当時どのような評価を受けていたのかという点についても考察の対象とした。高橋五郎訳『聖福音書』においては、植村正久が「文体の気力を存し」と評していたように、「能はず」「なかれ」ともに多く用いられていた。同様に、この二語の使用数が多いのが、「文章は漢文体にして、文章の古格を守り」と評されたニコライ訳『我主イエズスキリストの新約聖書』で、こちらも漢文訓読的な特徴が見られた。一方、「雅馴にて口調善く」という評価のあったラゲ訳『我主イエズスキリストの新約聖書』では、「能はず」「なかれ」ともに用例数が少なくなっており、特に不可能の表現として「能はず」ではなく、「え・・・ず」「連用形＋得」が用いられるなど、漢文の要素は少ないといえる。また、明治元訳からの改訳作業に際して、「文体ハ平易通俗」「文章措辞ハ（中略）荘厳ヲ保ツ」ことを目指し、現在でも「名文」「名訳」としての評判が高い『改訳　新約聖書』(「大正改訳」）も、「なかれ」を用いず「な」とするなど、漢文の影響から離れていくという特徴も有したものになっているのである。このように、個々の漢文訓読語法の使用状況を文章・文体について論じた様々な言説と対照させていくことにより、当時の日本語意識がより明らかになるということも明らかになった。

　以上、2017（平成29）年度からの5年間（期間延長1年を含む）の研究において、明治期初期の翻訳聖書および翻訳小説などの漢文訓読語法の調査を行うことにより、当時の「日本語意識」の形成過程の一面が明らかになるとともに、2021（令和３）年度の研究成果をふまえることにより、その「日本語意識」がどのように明治後期に引き継がれていったのかというさらなる研究課題への見通しが得られた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 齋藤文俊	４．巻 99-6
２．論文標題 明治後期における翻訳聖書の文体	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国語と国文学	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 齋藤文俊	４．巻 5
２．論文標題 翻訳小説の語彙	５．発行年 2020年
３．雑誌名 シリーズ日本語の語彙第5巻　近代の語彙（1）	６．最初と最後の頁 48－57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 齋藤文俊	４．巻 146
２．論文標題 訓点資料研究に期待すること「近世漢文訓読研究から」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 訓点語と訓点資料	６．最初と最後の頁 123-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 齋藤文俊	４．巻 15-3
２．論文標題 書評・八木下孝雄著『近代日本語の形成と欧文直訳的表現』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本語の研究	６．最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齋藤文俊	４．巻 なし
２．論文標題 明治初期における聖書の翻訳と日本語意識――漢文訓読語法「欲ス」を例に――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 歴史言語学の射程	６．最初と最後の頁 497-506
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 齋藤文俊	４．巻 4
２．論文標題 近代日本における聖書翻訳と漢訳聖書――「ナカレ」を中心に――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 論集：日韓学術交流会ー言語文化を巡ってー	６．最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 齋藤文俊
２．発表標題 近代日本における聖書の翻訳と漢訳聖書
３．学会等名 韓国外国語大学校CORE事業団海外学者招聘講演会・韓日学術交流会（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関